「もとはこちら」のお話し

№44　　今月のテーマ　　ピラミッドを造ろう

2010 年（平成 22 年）8 月 21 日（土）

大源様（おおみなもと）は

個我を超え、小我を超え、

大我をも超えた

実在的存在である

「我、常に大源様と倶（とも）にあり」

（平井謙次著「自己を生かす道」より）

北原ゆり筆

随分前の話です。平井先生に連れられて、ピラミッドを造ったというお宅に、お邪魔した事があります。

何でも設計の段階から助言などをなさっていたようで、「殆ど完成したから、一度見に来てほしい」という先方からの連絡が入ったから、との事でした。

丁度今頃の季節だったと思います。日も暮れかけた道を左に右にと車を走らせ、しばらくして先方のお家に着きました。

母屋とは別の庭先に、庭先とはいっても広いお庭のその中に、目指すそのピラミッドは堂々と建っておりました。ざっと外周りを見せて頂いてから、私達はそろそろと中に入りました。確かに初めに聞いていた通り、まだ完成していない、やりかけのところが何箇所かありましたが、広さにしてざっと８畳くらいはあったように思います。

聞けば、いま私達が立っているこの板張りの床下には、平井先生の助言のもと、浄化の為の炭が分厚くぎっしりと敷き詰められているとの事でした。

その炭も、そこらにあるような安価なものではなく、相当値のはる、立派なものを使っているという話。そのことから推しても分るとおり、細かなところまで手を抜かぬ、誠に立派な出来映えです。ピラミッドハウスというのでしょうか、その中にいて、私は只ただ驚くばかりでした。

一通りの説明を聞かせて頂いた後、ゆっくりと床の上に座らせて頂き、とにかくそのピラミッドパワーというものを、心ゆくまで体験させて頂きました。

その後、母屋の方に導かれ、お茶などをご馳走になり、帰ってまいりました。

ピラミッドパワーの不思議

帰りの車中、平井先生から、「あんた、何か感じたか?」と聞かれました。

そういえば先生はよく、新しい方をご紹介して下さった後に、「どう思った?」と聞かれたものでした。

いま会ったばかりの方に対し、私がどういう感想を抱いたかを聞かれ、それを何か楽しんでおられるようなところがありました。

「とても繊細。神経の細やかな方」とか、「豪放磊落!（ごうほうらいらく）」。「複雑怪奇。何かよく分らないところが、魅力的」などと、その都度思いつくまま

に勝手な感想を私は言っていたのですが、しかしその時は、今会って来たその方に対しての感想ではなく、ピラミッドそのものに対して、どう思ったかと聞かれたのでした。聞くところによると、人によってはその場に入ったとたん、ものすごいパワーを感じ、心身に異変をきたす人がいるとの事でした。自分の持つ波動が、あまりにもピラミッドの放つ波動と異なる場合は、丁度水と油が反発しあうように、心身に思わぬ事態が生じるのかもしれません。しかし幸か不幸か、平井先生も私達も時に何ごともなく、またそのピラミッドの持ち主の方もその奥さんも、裕々平然としておられました。

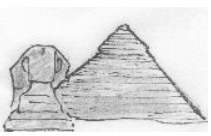
ピラミッドについては歴史的な意味合いだけでなく、それが持つ不思議なパワーについて、古来より様々な研究がなされているようです。

私も、平井先生のもとに通わせて頂くようになる何年も前の事ですが、本に書かれているピラミッドパワーというものが、現実に存在するものなのかどうか、そして仮にそれが存在するとして、それはどういう種類のものなのかを知りたくて、模型作りに挑戦したことがありました。

本によると、ピラミッドはたしか高さの三分の一だったかの一点に、宇宙の気が集まるようになっているそうです。それで例えば、その高さの所にコップに水を入れて置いておくと、宇宙の凝縮された強い浄化力によって、水はいつまでたっても腐らないとか、刃物が研がれたままの状態でいつまでも錆びないとか、はたまた、りんごが茶色に変色しないなどという様な事が書かれておりました。ミイラが腐らないのも、単に事前に防腐処理を施すからという事だけでなく、ピラミッドパワーによるもの大きいとも書かれていたように思います。

とにかくそういう事が本当かどうかを自分でも試してみたくて、厚紙を買ってきたのです。そして本に書かれていた通りに線を引き、はさみや糊を使って作ったのです。正確に言えば、作った、というのは間違いで、作ろうとした、というのが本当です。頂点の張り合わせの部分がどうしてもうまくいかず、作っては壊し、作っては壊し、結局その時は、自分の不器用さを思い知らされただけの事で終わりました。

そういう事がありましたので、平井先生から「ピラミッドを見に行こう」と誘われた時には、鼻息も荒く、喜び勇んでお供をさせていただいたという次第です。



汚れと浄化作用の中で

ところで、さびない刃物とか腐らない水はともかくとして、人間である私達も、思わぬ不幸な事態に遭遇した時などには、心が萎(な)えたり、腐ったりするものです。そしてまた、この頃盛んに言われている、例の活性酸素によって、体そのものが肉体としても錆びるという事が分ってまいりました。

しかしそうだからと言って、我が心身を腐敗や錆びからを守るためにピラミッドを用いる、などという贅沢な事が出来るのは、本当に恵まれた、極ごく一握りの人だけです。

毎日の生活に追われ、世俗の垢にまみれ、熾烈(しれつ)な生存競争の波にもまれ、他人から押しのけられたり、押し返したりと、命を削るような毎日を余儀なくされている私達にとっては、ピラミッドパワーの恩恵を受けるなどということは、夢のまた夢、ほど遠い話です。

このピラミッドや水晶、そして塩や炭などが持つといわれる強い力というのは、ひと言で言えば物事を浄化する力です。浄化とは、汚れや濁りを取り去り、清め、澄みきった状態にするという事です。

私達人間の浄化といえば、たとえば体についた汚れや垢は、お風呂やシャワーを使う事によって、きれいに落とすことができます。しかし今洗ったばかりの体を、もう一度念入りに洗ってみると、驚いた事に、また垢や汚れが出てくるのです。更にもう一度洗えば、前よりは少ないながらも、やはり垢は出るはずです。なぜか。それは私達が、生きているからです。

生きている限り、新陳代謝によって、古い細胞は新しい細胞に生まれ変わり、肉体は常に入れ替わっています。

これは表面に見える皮膚だけでなく、内蔵や血液など全てのもの

が、瞬々刻々、常に入れ替わっております。ですから厳密に言えば、一秒前の私の体と今の私のそれとは、もう別のものなのです。

肉体そのものがこのように常時変化し続けているように、実は私達の心も、常に入れ替わり、変化し続けております。肉体とは、心が造りだしたものであり、心が形となって現れたものです。ですから肉体の変化に伴って、常に心も入れ替わっているのです。

そしてまた、日々の体験や経験によっても、当然、心は瞬々刻々、変わって行き、この肉体が変化し続ける事によって垢や汚れが生じるように、心も変化する事によって、心の垢や汚れがいつも生じているのです。

かの文豪漱石は、「情にさお挿せば、流される。知に働けば、角が立つ。意地を通せば、窮屈だ。とかくに、この世は住みにくい」と、言われましたが、とかくにこの世は住みにくいとともに、私達もまた汚れやすく、澄みにくい体や心の持ち主でもあるのです。

心の汚れ

肉体の汚れは誰の目にも見えますが、心の汚れは目には見えません。ですからそれに気付く人は、案外少ないようです。

昔、平井先生が教えて下さった「アホの甚六」というお話がありました（甚六ではなかったかもしれません。間違っていましたら、お許しください）。その阿呆の甚六が、師匠から言われるままに、「はたきを用いて、チリを払わん」と言いながら、いつもお寺の障子の掃除をしていたという話です。

そのお寺の障子には、払っても、払っても、次々とチリが積もるように、生きている限り、私達の心にもチリだの埃だの汚れだのが積もってくるのです。それでこの自分の心の汚れに気がいた人は、自分から進んで心の掃除をする事もできますが、汚れに気付かない人は、多分掃除をする事もなく、いつも汚れたままの状態にあるはずです。

心が汚れた状態とは、ひと言で言えば、「楽しくない」心の状態です。やる事なす事がうまく行かず、腹が立つとか、人を恨み、憎むような状態、あるいは怒りの状態などです。

平井先生言われるところの「もとはソチラ」の心の状態です。

心が錆びたり腐ったりしたときには、何もかもが楽しくなく、面白くなく、中には自分だけでなく、他人を道連れにして、やけくそ自殺をしてしまうような人も出てきます。

いつも「自分」というものしか頭になく、他人の事など目に入らず、考えられないという状態です。あるいは人の不幸を喜ぶような心の状態や、「自分が、」「自分が、」と、自己主張や自己顕示欲の強い人は、間違いなく、心に汚れが溜まっている状態です。

そういえば神経症にかかっている人は、自分の事しか話さないとか、自分の事しか考えないと、よく言われています。そして症状が改善するにつれ、他の人の事や周りの事が見えてくるという話を、聞いた事があります。心の掃除が進み、心が澄んでくるにつれ、不足不満は消え、自己主張も自己顕示欲も影を潜めていくのです。

心が澄みわたるほどに、人は自我意識が薄れ、他人と自分の区別が薄らいでくるものです。丁度自我のない赤ちゃんが、人が泣いていると自分も泣き出すような、そういう状態です。

しかしそんな赤ちゃんも成長するにつれて、自然と自我が芽生えてきて、自分を主張するようになります。

この自我に目覚めながらも、その小さな自我を越え、大我の自分、相手と共に生きる自分、全体として生きる自分という事をはっきりと自覚し、調和のある生き方ができるようになった人が、いわゆる賢人であり、聖人ではないかと思います。

「もとはこちら」が　浄化のかなめ

このように、他人の事を考えられる状態とは、濁りが少なく、心が澄んで自我の薄らいだ状態です。

心の浄化、それはまず、自分の利益や自分の立場を最優先させるような、エゴ的心の汚れに気付く事から始まります。

「自分の心は、汚れてなどいない」と、言い切る様な人がいたと

すれば、それは傲慢（ごうまん）であり、無知そのものです。誰でも生きている限り肉体が汚れるように、心も汚れるのです。

（注、「本来の自分」は、あの祝詞（のりと）にも書かれている通り、決して汚れる事も、穢（けが）れる事もありません。「こころに諸々の不浄を想いて、こころに諸々の不浄を思わず」という事です）

元々この宇宙には、浄化の為のパワーが充ちあふれております。ですから私達はいつでも、あの太陽の光を浴びているように、浄化の力をも受け取っているのです。

そして、あの太陽の光が凸レンズによって集められれば、焦点は大きな熱源となって、火をも起こす力となるように、あのピラミッドとは、宇宙を浄化する力を一点に集めるように造られた、そういう建物ではないかと私は思います。

この宇宙に蔓延(まんえん)する浄化の力を一点に集中させ、凝縮させ、増幅させ、強力にするのがピラミッドであるとするならば、もとはこちらの生き方とは、まさに自分を強烈に浄化する生き方そのものだという事が出来ます。

ですから「もとはこちらの生き方」とは、ひと言で言えば、「自分を浄化する生き方である」という事です。

私達は肉体的には個々別々に存在しているように見えますが、孤立し対立しあうような存在ではなく、元々は一つのものなのです。私達は全体として生きており、互いに助け合う事によってのみ、一人ひとりが幸せになれるという、本来あるべき姿を知って、そういう生き方を実際にするという事です。

自分の欲得を抑え、自己を主張せず、全体の調和の中に自分の幸せを見出すという生き方です。例えばあのコーラスやオーケストラでも、一人が勝手に大声を張り上げたり、或いは自分勝手に、リズムを無視した演奏などをしたとすれば、全てがぶち壊しになるのと同じです。全体として生きてこそ調和が保たれ、それでこそまた、個々の存在も輝き、生かされるのです。

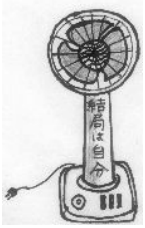
浄化作用は、自然の法則に従った「もとはこちら」の考え方、生き方を実際にする事によって、より強烈に凝縮され、強められ、私達の肉体上にも運命上にも良い形となって現れてくる事は、間違いありません。

もとはこちらの生き方は、心の中にピラミッドを造る生き方です。この目には見えない心のピラミッドは、形ある実際のピラミッドに勝るとも劣らない、浄化の為の強力なパワーを、瞬々刻々私達に浴びせ続けてくれる筈です。

そういえばつい最近、あのピラミッドの持ち主が、「自分は、もとはこちらに生きている」と話され、実際にそういう生き方をしているという話を、風の便りに聞きました。持てる資産を友人知人に開放し、沢山の人に喜んでもらっているという事でした。という事は、あのピラミッド、もしかしたら初めは「自分のために」と造られたのかもしれませんが、今は、もとはこちらの大きな拠点となって、多くの人々の喜びの場になっているのかもしれません。

今、もしも改めて平井先生に「あんた、どう思う？」と聞かれたら、即座に私はこう応えましょう。「先生と同じ匂いの方ですね」。

もとはソチラは、不幸の臭い（にお）、
もとはこちらは、幸福の匂い（にお）が致します。



編集発行人　もとはこちら会　資料編集部　北原友也
専用ＨＰ　http://www.motoha-kochira.com
mail:　data3@motoha-kochira.com